

≡G O D E A T E R≡ 世界が嫌いな少女

煌酒ロード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界を嫌い。人間を嫌い。全てを嫌い。人から嫌われ。

人間ですら無くなり、全てを怨み。自分を殺した少女が、仲間との紆余曲折をへて、自分を取り戻していく話

目次

初陣	1
ギルバート・マクレイン	7
喧嘩	11
エミール・フォン・シュトラスブルク登場	15
血の覚醒。目覚める記憶	21
仲間の存在。己の居場所	26
新メンバー登場	30
私の友達	34

初陣

適合試験後。私は何も考えずに神機の調整をしていた。適合試験が終わったのなら庭園でも見てきたら如何ですか？とは言われたが、そんな気分にはなれない。私の右手には私が最も嫌悪する物。神機使いの腕輪がついている。私は今日からここ、フライアで神機使いとして生きる予定だ。

「バスター、タワー、ブラスト。こんなものか」

使うパーツを決め、ロビーのソファに腰掛ける。私が所属するのはブラッド隊。フライア専属の部隊らしい。まあなんでもいい。憎いアイツらを、アラガミ連中を殺せるのならなんでもいい。

「あ、どーもー」

高い声。その方向を見るとなんか際どい服の、ネコミミ少女が立っていた。

「どーも」

ややぶつきらぼうに返事を返す。

「貴女もブラッドの新人さん？」

そう訪ねながら少女は目の前に座る。

「ええ、神咲悠華よ」

軽く自己紹介。目の前の少女は片手にパン。片手に大きな袋を持っていた。

「私もそーなんだー。私はナナ。よろしくね」

とにつこり笑ってから手に持っていたパンをすごい勢いで食べ始めた。……おでんに串をさしたまま。

「じゃあお近づきの印に……」

「(そご)そと袋をあさり同じものを取り出すナナ

「はい。お母さん直伝。ナナ特製おでんパン。おいしいよ」

正直いらぬ。そう思っ返そうとしたが、訓練の時間だと言っで立ち上がってさっさとゲートの方へ行ってしまった。残したら後で怒るからねーと言っで。

「食べないといけないね……」

食べてみると以外に美味しかった。私がマトモなのを食べて無
からかもしれないが、それでも結構美味しかった。

「適合試験。お疲れ様」

食べ終わって寛いでいると、長身の金髪が話しかけてきた。

「……誰ですか？」

嫌悪感を隠そうともせず対応する。しかし金髪は動じず。

「ブラッド隊長。ジュリウス・ヴィスコンティだ。これからよろしく
頼む」

隊長だった。失礼だったかなと思いつつ立ち上がって敬礼する。

「本日ブラッド配属になりました。神咲悠華かんざきゆうかです」

自己紹介をすればジュリウス隊長は苦笑しながら

「あまり恐縮しなくていい。ところで、もう一人新人がいたはずだが」
「それならさつき、訓練と言ってゲートに向かいましたよ」

と言った矢先。件の新人。ナナが戻ってくる。疲れたよとか言
いながら。

「ナナをつれて、指定のポイントまで来てくれ。実地演習を行う」

「了解」

そう言ってジュリウス隊長は去っていく。恐らく自分の神機を取
りに行ったのだろう。私はナナの所に行く。

「実地演習行くよ。このポイントまで神機持って来てってさ」

「えくまたく。もう疲れたよ」

「泣き言は私じゃなくて隊長に言いな。私に言ったってしょうがない
よ」

ナナがちよつと涙目になってるけど知らない。私には関係ない。
もつと言えば興味が無い。私はまだ後ろで涙目で泣き言を言ってい
るナナを置いて神機保管庫まで向かう。

「ブラッド候補生二名。到着しました」

間の抜けた声でナナが到着報告をする。私たちはジュリウス隊長
の前に整列していた。

「ようこそブラッドへ、隊長のジュリウス・ビスコンティだ。これより
実地演習を始める」

そう言つてジュリウス隊長は後ろを向く。後ろには今から戦闘を行う場所と、アラガミの死骸を喰うアラガミ。種別はオウガテイルだったはずだ。

「見る。あれが人類の天敵。駆逐すべき対象。アラガミだ。今からあれを倒す。お前等が実力を発揮すれば難しい相手じゃない。手段は問わない。あれを完膚無きまでに殲滅しろ」

「え？あのー？これって実戦……ですか？」

ナナの素朴な疑問。実地演習と言つておいてやることは戦闘。文句があるわけではないが、唐突に新人を戦場に放り出すのはどうかと思わなくもない。それでもあんな理不尽な環境に比べればまだマシだと思つてしまう。

「フツ、本当の戦場でやつてこそその実地演習だ」

ジュリウス隊長が言う。間違つては無いのだろうか……と思つた矢先。後ろからオウガテイルが飛びかかってくる。

「キャッ……」

ナナが怯えて目をつむる。私はバスターソードを横一文字に構え、水平に振るおうとしたが、それは金と黒のカラーリングのクロガネロングブレードに止められる。そしてオウガテイルはジュリウス隊長が左腕で止めていた。

「……ハアッ!!」

ブレード一閃。オウガテイルが吹き飛んでいく。ナナは目を見開いて驚いている。私はじつと立っているだけだ。ジュリウス隊長が振り返つて告げる。

「神咲……今何をしようとした？」

別人かと思えるほどの冷たい声。私に対して言ってるのは明白だが何をしようとしたのか？か……

「向かつてくる敵を斬ろうとしただけです？」

私には何が悪いのか分からない。私は敵を斬ろうとしただけだ。

「そうじゃない。今お前はナナごと敵を斬ろうとしたな？」

「それがなにか？」

驚愕の表情のナナと無表情の私と苦い顔のジュリウス隊長。

「身を挺して仲間を守れとまでは言わない。だが仲間を故意に殺すような真似はやめろ」

私には何を言ってるのか分からない。仲間？ 横のナナを見る。少し怯えたような表情で私を見ているナナを見て、本当に思った事を口にする。

「仲間って……誰ですか？」

唾然。周りの空気が凍り付いたのが分かる。でもこれだけは言っておかなきゃならない。

「たまたま部隊が一緒だった。それだけの理由で仲間ですか？ じゃあそいつは裏切らないんですか？ 仲間なんて言葉が使えるほどその子は信用できるんですか？ その子に後ろからぶち抜かれなくてという保証は？ 無いでしょう？ 隣にいて昨日一緒に笑ってた人に身ぐるみ剥がされてアラガミから逃げるための囹に使われる。そんなのが当たり前の世界なんですよ？ そんな世界でたまたま同じ部隊になった奴を信じると？ バカじゃないんですか？ 無理ですよ。」

「そうか……だが俺はそうは思わない。俺達人が、強靱な牙も、鋭い爪も持たない人間が今まで戦って来れたのは意志の力があつたからだと思ってる。人を信じる意志があり。だからこそ人は強く。ここまで戦ってこれたと思ってる。それが意志の力だ。」

これ以上の論議は無駄だと思った。両方とも並行論だ。私たちはわかり合えない。この時にわかってしまった。

「……もういいです。分かってくれないみたいですし。敵倒せばいいんですよね」

そう言っただけで私は飛び降り目の前のオウガテイルに向かっていく。バスターソードを肩に担ぐように構え、振り下ろす。それだけでオウガテイルの胴体が真っ二つになる。崩れ始めたオウガテイルからすれ違いざまにコアを回収。もう一体のオウガテイルに向かっていく。援護のように銃弾が飛んでくる。ジュリウス隊長のアサルトライフルの弾だ。援護のつもりだろうけど正直邪魔だ。けどそんなことはどうでもいい。目の前にいるのは敵。それも唾棄すべき敵だ。

「殺してやる……っ！」

バスターを横に薙ぎ払う。それだけでは止まらない。

遠心力を利用してもう一撃を叩きつける。オウガテイルの両足をそれで切り飛ばす。

「死ね……！」

バスターを背負うように構え、力を溜める。刀身が黒いオーラに包まれ、それを一気に振り下ろす。鈍い音と共にオウガテイルが正面から両断される。

「ハア……ハア……ハア……」

ブレデターフォーム

捕食形態の神機を死骸に突き立てコアを回収する。初めての实战だったが、疲れた。それ以外言うことは特にない。

「いい動きをする……だが命令違反はいただけないな」

「オレ、一応部隊員扱いなんですか？」

「問題ない。ただし、仲間を殺すような真似はやめてくれ」

「保証しません」

ジュリウスが苦い顔になり、ナナは若干怯えているようだ。そのときジュリウスの無線に通信が入る。

「ジュリウス隊長。新たなアラガミが接近中です。」

「種別は？」

「オウガテイルの模様です」

「よし、応戦するぞ」

オウガテイルか……相手できないほどでは無いと思うが一人は役立たずだ。ジュリウス隊長は役立たずをかばいながら戦うことになるだろう。要するに戦力としては期待できない。それでも負けるとは思えないが。と知っているのと目の前にオウガテイルが三体現れた。即座に臨戦態勢をとる。がその前に神機を肩に担いだジュリウス隊長がでてくる。

「ちように良い機会だ。お前達が目覚めるべき血の力についてここで見せておこう」

そうやってジュリウスが神機を構える。

「フツ……ハアアッ!!」

神機を顔の横の水平に構えるロングブレード特有の『ゼロスタン

ス」の構えを取る。そこから神機を真正面に構える。それだけで私たちの身体に力がみなぎる。

「なにこれ．．．．．力が．．．．．みなぎる!？」

「なにこの感覚．．．．．」

力がみなぎるような感覚。アラガミを捕食したときに体内のオラクル細胞が活性化するバースト現象に似ている。

「これが．．．．．血の力．．．．．オレ達が目覚めるべき．．．．．力なの?」

「そうだこれが人類の意志の力、そしてこれから目標に対してブラッドアーツを放つ。すこし下がっている」

「ブラッドアーツ?」

直訳するならば血の技と言ったところか。どんな技かはわからないけど、なんとなく凄そうだというのはわかる。

「そうだ．．．．．行くぞっ!!」

掛け声と共にジュリウスが疾走。アラガミの中心を駆け抜けると同時に神機を一閃。それだけで周囲に出現した無数の斬撃がアラガミを切り刻む。たったの一動作で三体のアラガミを屠った。

「嘘．．．．．」

少なくとも私はオウガテイルを倒すのに四発入れる必要があった。それをジュリウス隊長はたったの一撃で同じ敵三体を屠ってしまった。

「これが血の力．．．．．」

ナナも驚いたように口を開けている。

「これがブラッドアーツだ」

服についた埃を払いながらジュリウス隊長が戻ってくる。だがそんな話なんて私は聞いていなかった。私が考えていたのはただ一つ。あの力があればもつと強く。もつとたくさんのアラガミを殺せる。

多分だが今の私の目は、新しい玩具を見つけた子どものように輝いているんじゃないだろうか。私は絶対に習得してやると思いながら、その場所を後にした。

ギルバート・マクレイン

帰投した後、私たちはラケル博士に呼ばれて、博士の研究室にいた。私とナナ、それと変な帽子をかぶった金髪のチャラ男。見た目で決めた。おとなしくラケル博士の話を書く体制を取る。

「よく来ましたね、ブラッド候補生の皆さん、本来なら、正式な晩餐会を催したいところですが……」

正直コイツの事は好きになれない。私と同じ臭いがする。拾ってくれた事には感謝はしてるし、ゴッドイーターになれたのもこの人のおかげではある。でも気に入らない。私と同じ……ぶっ壊れた臭いがする。

「あれ、ロミオ先輩も「候補生」なの？」

どうやらナナは横のチャラ男と面識があったようで親しげに話している。どうやらチャラ男の名前はロミオとか言うらしい。

「うるさいぞナナ……!」

どうやら先輩を気取ってたらしい。だが同じ候補生である事がわかって、すこし恥ずかしいらしい。まあどうでもいい。横でもめてる二人を無視する。

「ふふっ……すっかり仲良くなって、うれしいわ」

どこがそう見えるのか教えて欲しい位だ。特に私はナナを叩き斬ろうとしてからそんなに日が経ってない上に、謝罪もしていない。私は悪いと思っただけ。

「それでね、今日は皆さんにブラッドとしての心得を、お伝えしておきたくて」

「よ、よろしくお願いします」

見事にハモる二人。私は真顔で座っている。正直今すぐ煙草吸いたい。そのくらいどうでもいい。支給品の煙草を冗談半分で吸ってから、私は半ばジャンキーのように煙草を吸うようになっていた。まあそんなことはどうでもいい。ラケルが説明を続けているが私はそんな話は聞いていない。興味も無い。最後にラケルが少し変なことを言っただけ。その後私達はロビーで談笑していた。といっても

私はロミオに無理矢理連れられてきたようなものだ。話はロミオとナナのミツシヨンの話になっていく。

「だいたいナナは突っ込みすぎなんだよー。もっと敵の動きを見極めてからさー」

「えー、ロミオ先輩がびびりすぎなんじゃないの〜?」

「そういうながらナナがロミオに顔を近づけていく。」

「ちよ……、ナナ?近いよ……うあつ」

ロミオが私にぶつかり、私が後ろの誰かにぶつかる。

「あ、すいま……うあつ」

よく変な声をだすなチャラ男。それはそうと私がぶつかったのは綺麗な薄い金髪の女の人だった。職員にこんな人はいなかったし、神機使いでも無いはずだ。というより、神機使いでこんな人がいたら絶対に忘れてない。と思う。

「まったく貴様らは……すいませんねえユノさん」

軍服に金の飾りをジャラジャラつけたデブが歩いてきて私たちには呆れたような声を、ユノと呼ばれた金髪の人には甘く気味のわるい猫なで声をだしていた。直感した。こいつ絶対自分たちより上でふんぞり返るのが仕事の人間だ。死ぬ。名前?覚えているものか、初対面だ。

「フフツ……あんまりロビーでははしやがないようにね?大切なお客様に迷惑でしょう」

赤髪の科学者の様な制服を来た人がそんなことを言う。この人は確かレア博士。ラケル・クラウディウスの実の姉で、神機兵の無人運用を研究している人……だったはず。

そんな事を考えているとラケル博士達はすでにエレベーターへと向かっていた。そのとき軍服男が

「すいませんねえ、戦うことしか能のない奴らで」

そんな事をのたまっていた。だから思わず。

「威張り腐ることしか能の無い奴よりはマシよ……」

そう呟いていた。しかし聞こえなかったようで、黙ってエレベーターに乗り込んでしまった。後ろを振り向くと、ロミオがユノにぶつ

かった時のまま固まっていた。しかもあ、ああ……とか言いながら。ぶん殴ったら元に戻るかな、と思いつつ拳を握りしめ、殴るよりも先にナナがロミオに

「今の人誰？有名か？」

と声をかけたので殴れなかった。

「バツ……お前、あれ、あれ、ユノ！」

ちよつと興奮したような声でロミオが喋る。

「ユノ？知ってる？」

「知るわけ無いでしょ……」

「知らないの!?葦原ユノ、ユノアシハラ！歌手なの！超有名人！」

また興奮したような口調でロミオが喋る。どうやらかなりの有名な人らしいが、

正直どうでもいい。

「ナナ、付き合ってあげて」

私は興奮しているチャラ男、もとい変態に蔑みの目を向けつつナナに相手を任せ、カウンターに向かう。今日はドレッドバイク二体とナイトホロウ一体の討伐だ。同行者はいない。変態とナナが一緒に行くよと言ってくれたが断った。冷たく。だから一人だと思っていた。

「こんな話聞いてないんだけど……」

「こつちもだ」

私は任務を受けて現地に来た。そこまでは良かったのだが、現地のアラガミは既に倒されていた。自らをギルバート・マクレインと名乗る、帽子の長身の槍使いに。彼はブラッドに配属されるためフライアに向かう道中でアラガミに襲われ、仕方なく応戦したことを説明してくれたので、私はフランさんに照合をお願いしていた。程なくしてフランさんから連絡が入る。

「照合完了しました。その方はギルバート・マクレインさん。ブラッド配属予定の神機使いです」

私は頭を抱えてため息をついた後、煙草を啜え、火をつける。紫煙を吐き出しているとギルバート、長いしギルでいいか。が寄ってきた。

「フライアへの確認は出来たのか？」

「ええ、ギルバートさんですよ。先ほど確認が取れました」

「そうか。と呟いたギルさんが私の前に来て

「そういう事は辞めた方がいい。特に未成年はな」

「そう言つて私の口から煙草を取り上げようとするが、私は上体をそらして足をかける。

「うおっ!？」

驚いたようにギルがつんのめる。前に、しかもそのままコケる。

「……………」

互いに無言。今の体勢は完全にギルが私を押し倒している。

「わ、悪い!」

慌てたようにギルさんが立ち上がる。

「そういう事がお望みなら隠れてやってくださいよ。後私マグロですけどいいんですか? いいんなら体くらい別にいいですけど」

本心だ。別に今までそういう事があつた訳では無いが、感情の起伏が少ない私はたぶん行為においても終始マグロなんじゃないだろうか。後なんでギルは驚いた顔してるんですか。とか思っているとギルに肩を叩かれ

「軽々しく女が体を渡すとか言うんじゃねえよ」

怒られた。初めてだ。誰かに怒られるのは。奇異の目驚愕侮蔑嘲笑気味悪い物を見る目。今までいろんな目を見てきたけど、こんなにまっすぐに、私を見る目は初めて見た。だから私はそんな目が見えていられなくて、目を合わせる事が出来なくて。

「うるさい……………ほら、迎えきたし、帰投するよ」

だから、必要以上にぶつきらぼうな口調になって、流れる一粒の涙を見られたくなくて、向こうを向いて車に乗り込んだ。

認めたくない。

自分の中の“人間”なんて

弱い弱い、あのころなんて

喧嘩

フライアにギルさんを連れて帰ってすぐに、ギルさんは問題を起こした。問題と言っても大した事じゃない。唯単にしつこくいろいろ聞いて来たチャラ男をぶん殴った。

「いきなり何すんだよ！」

頭に来たのか叫ぶチャラ男もといロミオ。そこにやってきたジュリウスが

「状況を説明して欲しいな」

冷静に尋ねる。誰かが口を開くよりも先に、ギルさんが喧嘩でも売るような口調で

「あんたが隊長か、俺はギルバート・マクレイン。ギルでいい。このクソガキがむかついたから殴った。それだけだ。懲罰房でも除隊でも、好きに処分してくれ、じゃあな」

それだけ言うとエレベーターの方にさっさと歩いて行ってしまった。

「アイツ……乱暴すぎるよ……そりゃ俺もちよつと聞き方しつこかったかもだけどさ……」

「暴力はよくないねえ。確かにロミオ先輩も聞き方しつこかったけどね」

「……誰もギルさんが怒ったことについて気がついてない。ロミオの聞き方がしつこかったとかそんなんじゃない。あれが拒絶反応だと言うことに……誰も気がついてない。」

「これは……どちらが悪いかな……」

少し悩むジュリウス、どちらが悪いかを決めあぐねているようだ。

「どちらが悪いと思うか？神咲」

「……ロミオが八割。ギルさんが二割」

「そうか……」

「なんでだよ！あいつが殴ってきたんだろ!?絶対あいつが悪いよ！」

殴ったことを踏まえてもアンタが悪い。そう言いたくなつたが私には関係ない。立ち去ろうとするとジュリウスに肩をつかまれ、

「俺が考えた場合どちらも五分五分だと思っただが……なぜロミオが八割なんだ？」

私は煙草を口に啜えたままだったので一度紫煙をはき出してから、「ロミオ……殴られた程度でよかったと思いな、あの質問を私にしたら今頃アンタの首は胴体とおさらばしてる」

ロミオの顔が驚愕に変わる。

「人に過去を聞くってのはそう言う事よ。人にとってはその過去が自分の思い出したく無いものとかだったり。忌むべき記憶だったりするの。それをアンタは軽々しく突っついたのよ？よかったね。優しいギルさんで、アンタ命拾いしたのよ？」

ロミオの顔が訳が分からない。と言う顔になる。

「アンタまさか、自分以外の人間がみんな自分と同じような環境で育ったかと思って無いでしょうね？アンタは相当恵まれてんのよ？毎日ご飯食べれて、ベッドで寝れて、毎日安全に過ごせて、至れりつくせりね。ゴッドイーターになる前からそうだったんでしょ？」

マグノリア・コンパスという養護施設がある。そこで育ったロミオ・ジュリウスは外の世界を知らない。外では自分たちが生きていくことすら困難なんだ。

「アンタみたいに守られて育った奴に分かれて言うのも酷かもしれないね、どうせわかりやしないよねえ？」

ロミオはしよげたようにうつむいていた。ここまで言っただけで考えないようならもう救い用なんて無い。くだらない。そう思っただけで再び煙草を啜える。そうするとジュリウスから

「神咲の言うことももつともだが、これから仲間になるという間柄だ。少しの喧嘩もあるだろう。今件に関しては不問とする。しかし、戦場に私情を挟まないように関係を修復しておくこと。それから……」
ジュリウスが私の方を向く。私は横を向いて煙草を啜えたまま、横目で見る。

「神咲はもう少し人を思いやれ、いいな？」

「……無理ね」

それだけ行っただけで私もエレベーターの方に向かう。正直ギルさんに

も一言言っておかないといけないだろう。あの人の性格上。自分から歩み寄ることは絶対にしないだろうから。

庭園で一人黄昏れてるギルさんを見つけ、近づいていくと足音に気がついたのか、ギルさんが顔を上げ、私だと気づくと話しかけてきた。「俺の処分が決まったか？」

「さあね、うちの隊長様はお優しいから、不問だつてさ」

私は新しい煙草を啜えて火をつける。とたんにギルさんが少し苦い表情になる。

「煙草の煙が嫌いだった？」

「別に、そういうわけじゃないさ」

あくまでクールにしているが、うかつに奪い取ろうとしてさつきみたいになるのが嫌なんだろうが、そう露骨に嫌そうな顔で別にとか言われてもね

「そういう風には見えないけどね……まあいいわ。後でいいからロミオに謝つときなさいよ。面倒くさいんだから」

「面倒くさいって……」

「お優しい隊長様は、仲間になる存在とギスギスした関係のままいるなってさ、あの調子じゃあのチャラ男。絶対に折れないだろうから、年上が折れなさいって意味よ」

紫煙をはき出しながら言う。ギルさんは苦笑をこらえているようだ。

「了解だ。そういうやさつきは変な空気にしちまって自己紹介もしてなかったな。俺は——」

「別に良いわ」

「は？」

「自己紹介ならあいつ等にしときなさいって意味よ。名前は覚えたし、スパイ使いなのも知ってる。後は興味ないし」

凍り付いたように固まるギルさん。そして

「仲間とは親交を深めておけつてというのが隊長さんの命令じゃないのか？」

「そうよ、だからそういうのは仲間でしなさいって言ってるの。私に

したってしようがないよ」

「あんたは……同じ部隊の仲間じゃないのか？」

「アンタも同じ部隊だからって仲間にする気？悪いけど違う。仲間が必要なら他を当たって」

私は庭園の奥に生えている木にもたれかかってヘッドフォンで音楽を聴き始める。もうこれ以上誰かと話をする気は無かった。

ギルバートSIDE

初めてだ。ここまで他人を拒絶する相手に出会ったのは。絶対零度。そんな雰囲気正しいのかもしれない。確かに同じ部隊にいるからと言うだけで仲間というのはいささか乱暴かもしれない。しかし、コイツのこの態度は異常だ。過去に何かあったのだろうか。それを聞くのは失礼だ。

「しようがねえ……ロミオに謝りにでも行くか……」

俺は木陰で音楽を聴き始めたそいつを残して、エントランスへと降りた。

エミール・フォン・シュトラスブルク登場

「そっち行ったぞ!!」

ギルさんの声、それと共に目の前の池からウコンバサラが飛び出してくる。私を見つけ、大口を開けて飛びかかってくるが、私は既にチャージクラッシュの体制に入っている。刀身が黒いオーラに包まれる。

「死にな……」

真横に構えたそれを躊躇いなくウコンバサラの口に叩きつける。上下に分かれるようにウコンバサラの身体が両断される。両断されたウコンバサラからコアを回収し、ギルさんと合流する。

「もう少し戦い方を考えろ、今の一步間違えば死んでたぞ」

「余計なお世話」

私は煙草を啜え、火をつける。なぜか前回の会話から私の事を気にかけているのか、やたらと私についてくるのだ。前に何でそんなについてくるのか聞いた時には、

「そんな寂しそうな目をした奴を放っておけるか」

と言われた。私は頼んでないが、一人より二人の方が任務が効率的に終わるのは確かだし、ギルさんはかなり腕の立つ神機使いだ。だから別に不満がないわけでは無い。時折説教をされるが、それもすぐ終わるし私はだいたい聞いていない。それが分かっているのかそれとも諦めたのか、少なくとも煙草とお酒に関しては何も言われなくなつた。

「いいからさっさと帰投するよ。私お酒飲みたい」

「ハア……ま、戦場に長居するのはよくないしな。帰投するか」

迎えのへりに乗り込みフライアに到着。ゲートから部屋に戻ろうとすると、

「ブラッドと言うのは、君たちか？」

誰だコイツ。多分二人して同じ事思っただろう。ギルさんに知ってる？って顔を向けると知らんって返される。それを知らないから

か、目の前の金髪貴族は告げる。

「フフ、緊張するのも無理はない……だが安心したまえ！この僕が来たからには、心配は完全に無用だ！」

いちいち大げさな動作と芝居がかかった口調で喋るコイツは何者なんだと思つてそれを聞こうとするより先に

「おっと、失礼した……。僕はエミール……。栄えある、極東支部第一部隊所属！エミール・フォン・シュトラスブルクだッ！」
「……………そうか、よろしくな」

だるそうな声で律儀に返事をするギルさん。私は吸い終わった煙草の吸い殻を携帯灰皿に入れ、新しい煙草に火をつけていた。今日三十本目だった気がする。無視を決め込むことを決めた私は向こうを向いて、紫煙を吐き出す。エミールさんはひとしきり力説した後に、
「我々の勝利は！約束されているッ！」

とか叫びながら階段でこけた。そりやもう盛大に。

「また面倒な奴が来たな……………」

邪魔なら殺せばいい。私の中ではそんなレベルなんだが…………ギルさんにとっては面倒ごとらしい。

翌日

どうしてこうなった。つてぐらいに頭を抱えなくなった。ヘリの中には三人。全員同一のミッション。目標はウコンバサラ二頭。なのになんでヘリの中で、演説を聴かなきゃいけないのだろう。ヘリの中なので煙草が吸えない。それが私の苛立ちに油を注いでいた。ギルさんは寝てるので、必然とこの人の相手をするのは私になり……
「あのような闇の眷属共を許しておくわけには行かないッ！だからそのためにも！この僕は立ち上がったのだ！」

「そうですか……………」

ぶっ殺したい。何度目か分からない殺意を押し込める。ここで殺したら血で私が汚れる。アラガミの血と違って人間の血は臭いが落ちにくいから嫌だ。今着てるのは、支給された制服の大剣用の下と槍用の上だ。正直変わりはいくらでもあるが、少し改造を入れているので

無駄にはしたくない。つまり適当に相手をしなくてはならない訳で、
「お前等、そろそろ降下ポイントだ。準備しろ」

このギルさんの一言に救われた。

「目標はウコンバサラ二頭。セオリー通りに一体ずつ……」

「闇の眷属共ツ！今ここでこの僕のハンマーで地に返してくれるツ
!!」

ギルさんの説明も聞かずに飛び出していくエミールさん。ホント
なにしに来たんだあの人。

「どうする？」

「私たちは近場にいる一頭を倒そう。アイツは見つければ合流。死ん
でれば回収。それでいいでしょ」

ギルさんは渋そうな顔で了解だ。と呟く。本来なら合流するべき
なのだろうが、生憎と私は一人で突っ走るバカをわざわざ迎えに行く
ほどお人好しじゃない。そいつが死のうと別に構わない。勝手に
突っ込んで勝手に死んだ奴に何か感じるほど私は人間出来てもいな
い。

「いたな……」

一頭目を発見。周囲に敵影無し。

「俺が正面から仕掛ける。その隙に倒してくれ」

私が頷くとギルさんが突っ込んでいく。スピアをうまく使い、ウコ
ンバサラを誘い出していく。

「後ろがガラ空きなのよ……」

背を向けたところに私がダツシユ。その勢いのまま肩に担ぐよう
に構えたバスターを振り下ろす。鈍い音と共に、ウコンバサラの頭
上。タービン状の部位が崩壊する。

「ハッ……」

ギルさんの短い声と同時に突き出されたスピアがウコンバサラの
右顔面を削る。甲高い悲鳴と共に、ウコンバサラが逃げだそうと向き
を変えるが、

「遅せえよー」

その声と同時にギルさんが神機を捕食形態にして、左後ろ足を食い

千切る。バランスを崩して転倒するウコンバサラの正面で私が神機を構える。

「死んで……………」

神機が黒いオーラに包まれ、それを力任せに振り下ろす。頭から両断されたウコンバサラはその場に崩れ落ちた。

「やったな」

コアを回収しているとギルさんが近寄ってくる。

「もう一体をさっさと探さず、あのバカが相手しているはずだ」

正直もうあのバカの事とか忘れていた。これ私とエミールさんだけだったら確実にエミールさん死んでたな。断言できる。向こうの方から叫び声とかが聞こえたので、そっちに行ってみることにする。

「ぐおおおおおおおッ!!」

噂のエミールさんが吹っ飛んで現れた。どうやらウコンバサラに正面から突っ込んでいっては吹っ飛ばされているようだ。普通はウコンバサラは一人なら真横から攻撃を仕掛ける物だ。それを完璧に無視している。

「チツ……………一人で突っ走りやがって」

ギルさんが舌打ちする。そりゃしたくもなる。自信満々に出て行くからどれだけ強いのかと思えばあのザマだ。

「いいだろう……………こちらでも死力をもって相手してやうおああああああッ!」

また正面から突っ込んで吹っ飛ばされている。学習しないんだろうか、あの人は。

「尋常ならざる怪力……………」

そりゃアラガミだし……………」

「だが今度はこちらの番だ……………必殺ッ! エミール・スペシャル・ウルトラあああああああッ!」

同じ事を何回繰り返す気だっつくらいに吹っ飛ばされては突っ込むを繰り返すエミールさん。

「さっさと終わらせるぞ」

「ここは僕に任せてくれ! 僕の騎士道精神を君たちに示してみせるッ

！」

「悪いがお前の騎士道精神とやらにつきあつてる暇はないんでな」

そう言つて加勢しようとするギルさんを私が止める。

「………何で止める？」

「本人がやりたいって言つてるんだからやらせてあげれば？それで死んだつて知らないし、仮に死んだら囹に使える。喰つてる間に攻撃できさる」

私は真面目に言つてるのだがギルさんはどこか釈然としない顔で

「勝手にしろ………」

そう言つて帽子をかぶり込んだので、私も煙草に火をつけた。それを是と取つたのかエミールさんはウコンバサラに向き直る。

「ゴ、ゴットイーターの戦いはただの戦いでは無い」

また何か始まつた。そう思つたが

「この絶望の世において！神機使いは！人々の希望のよりしろだツ！」

………初めて聞いた。真面目な声。芝居がかかつている口調は変わらないが、その声には己の決意が込められていた。

「正義が勝つから……民は明日を信じ。正義が負けぬから皆！前を向いて生きるツ！」

そんな事を言つた神機使いは私の周りにはいなかった。あの場所にいた神機使いはそんな高尚な決意は無かつた。

「故に僕は！騎士は！絶対に倒れるわけにはいかないのだツ！！うおおおおおおおおおッ！」

食いついてくるウコンバサラの顎をかわすように飛び上がるエミールさん。そのまま落下の勢いを利用して力任せにハンマーをウコンバサラの頭に叩きつける。短い悲鳴と共に倒れ伏すウコンバサラ

「ハッ……バカはバカなりに筋の通つた奴みたいだな」

筋の通つた奴……私の中で今のエミールさんは眩しすぎた。自分の生き様を貫き通す。私の知つてる神機使いとは違う人がここには多すぎる……。私が怨んできたのは一体何だったのか。

「やった・・・やったぞ！騎士道精神の勝利だ！！うおおおおおお
おおおおおお！！」

叫んでいるエミールさん呼びに行ったギルさんと別れて一人帰
投ポイントに向かう。

このモヤモヤした感じを押さえながら。

血の覚醒。目覚める記憶

「今日はコンゴウ二体の討伐だ」

ブリーフィングでジュリウスが告げる。こんな簡単な任務でなぜこんな場が設定されたのか、それは

「そして今回のミッションは二チームで行動する。α班は神咲、ロミオ、ナナ。β班はジュリウス、ギルバート。そしてエミールさんに同行してもらおう。なお、各班の班長はα、神咲。β、ジュリウスで行く。」
コンゴウ二体は東西に別れて行動している。これを好機と見て、各個撃破しようという作戦だ。

「質問をいいかな？ジュリウス隊長殿」

こいつはいちいち大げさな、喋り方をしなければ満足できない病なのか？と思うくらいこの人はここに来てからこの口調を崩さない。

「今回のミッション。片方が先に討伐した場合。先に討伐した方のチームはどうする？」

ただこの人言ってることは真面目なことが多く、巫山戯た発言も多いが、真面目な時は真面目な人だと思っている。

「先に討伐を完了したチームは、周囲の安全を確認後、速やかに別チームの救援にむかう。」

納得したように頷き座るエミールさん。そこでジュリウス隊長が締めくくる。

「細かい作戦は後に班長から通達。実力を出し切れれば手強い相手じゃない。落ち着いていけ。」

「」「了解!!」「」

それから細かい確認をしてゲートからヘリに乗って出撃。ヘリの中では和気あいあいとした会話が広がっているが、私は混ざらずにいた。

「混ざらなくていいのか？」

横を見ると、ギルさんが私と同じように、端の方で座っていた。

「必要性を感じないから」

とだけ答えると、ギルさんは少し渋い顔で、

「ガキの内からそんな閉鎖的だと、いいことないぞ」

「余計なお世話」

そこで会話は途切れる。作戦ポイントに着いた。

「私たちから先に降りる。私は先に行くから」

それだけ言って私はヘリから飛び降りる。降下ポイントでもない、コンゴウの真上に飛び降りる。

「ちよ、神咲！指示は!？」

無線にロミオの声が飛び込んでくる。なんで私がここで飛び降りたのか分らないのか。

「私の邪魔にならないように引っ込んでろ!!」

それだけ言って無線を切る。コンゴウが落下音に気がついて顔を上げる――が、

「遅いんだよ…….…….」

神機を捕食形態プレデターフォームに変形させ、コンゴウの背中。パイプ状の部位めがけて食らいつかせ、落下の勢いを殺す。背中のパイプを食い千切り、私は地面に立つ。

「ハッ……!!」

そして横に回転しながらバスターソードを叩きつける。鈍い音と共にコンゴウの顔が砕ける。叫び声と共にコンゴウの周囲に爆発のような風が巻き起こる。

「チッ……!」

シールドを展開。無理な体勢からの不完全なガードだったからか吹っ飛ばされはしたが問題はない。体制を低くしてコンゴウに向かって突進。空気の固まりが打ち出され、こつちにむかつてくるが最小限の動きで回避。腕にかすったがその程度なら問題ない。

「死にな……!!」

ダツシユの勢いをつけてバスターソードを真上から振り下ろす。両断するには至らなかつたが、コンゴウをダウンさせることに成功する。

「ハアッ……!」

肩に担ぐようにバスターを構え、チャージ体制に入る。コンゴウは

起き上がろうとするが、

「遅い……!」

私がチャージを終わらせる方が速い。黒く染まった刀身を叩きつける。断末魔をあげて、コンゴウが沈む。それと同時に通信が届く。「こちらブラッドβ。こちらもコンゴウの討伐を完了させた。ブラッドα。そっちはどうだ?」

「こちらブラッドα。こっちも問題ないわ」

「了解。周囲を警戒した後。合流しよう」

了解と短く返して通信を切る。周囲には何も見えないし、気配も感じない。これなら大丈夫だろうと重い、合流ポイントに向かう。

「うおおおおおおお!!」

どこかで聞き覚えのある叫び声と共にエミールさんが逃げてくる。「何故だ、何故神機が動かない!!ピンチだ!!まさしくピンチだこれは!」

訳の分からない言葉を叫びながらエミールさんが吹っ飛ばされる。エミールさんを吹っ飛ばしたのは巨大な狼のようなアラガミ。見た目としてはガルムに近いが、カラーリングが白になっている。

「新手って訳ね……」

神機を構え直し、相対する。同時にアラガミが目の前から消える。

「なっ……!?!」

直後に横からの殴りつけられ吹っ飛ぶ。素早く立ち上がり前を見る。

「舐めんなっ!!」

追撃とばかりに飛びかかってきたアラガミの一撃を後ろに跳んで避ける。着地の瞬間を狙って飛んできた尻尾をシールドを展開することで避けようとするが、

「チツ……!」

シールドが開かず吹っ飛ばされる。立ち上がろうとするが神機がいつもより重い。

「神機が十分に動かない……!?!なんで!?!」

別に整備を怠っていた訳では無い。そう言えばさつき逃げてきた

エミールさんが神機が動かないとか言っていたが、世迷い言でも言い訳でもなく。単純に事実だったと言うことに驚愕する。

「コイツの仕業だって言うの・・・？」

原因は一つ。目の前のコイツ以外には考えられない。動かない神機でどう戦うか。本能が告げる。無理だと。

「巫山戯るな！こんな所で死んでたまるか！」

何かあるはずだ、何か。私の気づかない何かがある。死にたくはない。ここまで生きたんだ。死んでたまるか。記憶が蘇る。あの日。真っ暗な地の底の研究所で。真っ赤な色の液体を全身に浴びながら、その鉄臭い臭いと、錆たような味と、死体の冷たさと、血の温もりを感じて自分は生きてるんだと思ったあの日。この状況を打開する手ならあった。私が忘れていただけだった。そして更に蘇るのはそう遠くない記憶。初めて神機を手に入れ、戦ったあの日の記憶。蘇るのはたった一言。意志の力。

「舐めんじゃねええエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

叫び声と共に神機の刀身が紅く染まる。同時に左手が黒いオーラに包まれる。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

人の物とは思えない叫びと共に私は跳躍する。今の私は人間じゃない。

「オアアアアアアアアアアアアツ!!」

アラガミの左足に神機を突き立て、アラガミの左顔面を殴りつける。アラガミの目が潰れ、腕を引き抜くと、血が飛び散る。その血を全身に浴びながら私は生を実感していた。

「アアアアアアアアアアアアアアアア!!」

右手に持った神機でアラガミの顔面をすくい上げるように殴り飛ばす。アラガミが吹っ飛び、起き上がって犬のように身体を震わせる。それを見て、追撃を駆けようとするが身体が動かない。意識や力はアラガミになっても、身体は人間だ。意識と力に身体がついていけないかった。

「遅くなっただ!!」

ギルさんの声と同時に、目の前のアラガミに三方向から一斉に射撃を浴びせる。

「ハア．．．ハア．．．ハア．．．」

急激に遠ざかっていく意識。倒れる私を支えてくれる腕はギルさんの腕で、その感触は現実の物で、私はそれに安心して、意識を手放した。

ギルバート side

「遅くなった!!」

本当に遅くなった。このアラガミの存在に気がつかず、呑気に周囲の探索をしていた数分前の自分を呪いたい。

「つと．．．」

倒れてきた神咲を支え、目の前のアラガミを睨みつける。ガルムに似通った全体的に白いアラガミ。名前は知らないが、強いと言うことだけはわかる。神咲はそこら辺の神機使いよりかは遥かに強い。同期のロミオやナナが弱いと言ってるわけでは無いが、それを鑑みても神咲は強い。そんな奴がここまでボロボロにされているのを見て、目の前のアラガミが弱いと思える理由はどこにもなかった。

「来るか．．．!?!」

遺跡の上に駆け上がり、こちらを見下ろしてくるアラガミ。全員が臨戦態勢を取る中、

「逃げた．．．?」

アラガミは興味を失ったようにそっぽを向くと、どこかへ行ってしまった。

「何だったんだアレは．．．」

俺達は困惑しながら、そいつの後ろ姿を見送っていた。

仲間の存在。己の居場所

帰投した後にバイタルチェックを受け、私はラケル博士の前に連れ出され、いろいろと言われた。

“喚起”の血の力。成長の息吹だとかなんとかラケルは言っていたが、するけどどうでもいい。私にとって重要なのはもう一つの方だ。

「バレた……」

そう。バレてしまった。私が人間じゃ無いことが。こんなに速くバレてしまうとは思わなかった。それでも私はこのフライアで生きること許されている。

「どうしたいんだろうな私は……」

昔言われたことを思い出す。お前に生きる意味など無い。お前は俺達の実験動物だモルモットと。あげく放り出され、それでも私は今こうして生きていく。フライア全員には私がアラガミであることは知らされた。そのせいか知らないがなんとなく避けられているのは知っていた。

「何かあります……?」

少々お待ちを、というフランさんの声も心なしか少し固い。当たり前か、と少し自嘲気味に感じる。人類にとってアラガミは恐怖の対象であり。敵なのだ。そんな奴が今日の前にいる。それだけで恐怖だろう。

「ガラム一頭の討伐が入っています。頼めますか?」

「了解」

あれ以来私はなるべくフライアにいないようにしている。フライアに戻るときは最低限補充が必要。もしくは神機の整備をするときしか戻っていない。

「神咲」

呼ばれて振り返るとそこにはジュリウス隊長が立っていた。

「少し話があるんだが……時間はいいか?」

「任務が終了した後でいいのなら」

「そうか。なら手伝おう」

ジュリウス隊長を加えたガラム討伐はあっという間に終わった。大した相手では無いというのもあるが、ジュリウス隊長はかなり腕の立つ神機使いなので、それによるところが大きかった。

そして今私は、庭園でブラッド隊の面々と顔を合わせていた。

「単刀直入に聞きたい。お前がアラガミだというのは本当か？」

ギルさんが固い口調で問う。

「……………だつたら何？私を殺す？」

「……………殺さねえよ」

呆れたようなギルさんと真面目な私。悪いが私は死ぬわけには行かない。だから殺されるのなら逃げ出すつもりだ。

「なんで言ってくれなかったんだよ」

「ロミオ先輩の言うとおりだよ、なんで？」

「……………言つたら殺されるからよ。」

外で生きる人間にとつて、自分の弱点を晒すというのは一番やってはいけないことだ。特に女はそう。いつ襲われるか分かったものじゃない。アラガミにも人間にも

「……………で、私はどうすればいい？貴方たちの奴隷ペットにでもなればいい？それともどっかに監禁でもして性処理用の玩具にでもする？なんなら今ここで脱いだつていいんだけど？」

私は本気で服を脱ごうとするが、ギルさんに止められた。

「脱がなくていい。そんなことをするつもりもねえ。お前はもつと自分を大切にしろ」

前にもそんなことを言われたな。だつたらなんでこんな場を設けたのかがわからない。

「俺達が言いたいのは一つだ……………神咲。ブラッド隊は仲間だ。

俺達はお前を迎え入れたいんだ」

ジュリウス隊長の言葉に私は面食らう。

「何であんた等は……………」

訳が分からなくなる。私は……………

「何であんた等はそんな事が言える!!なんで敵かもしれないヤツを簡単に仲間に迎え入れることが出来る!!何であんた等はそんな事がで

きる!!」

もう何も考えられない。訳が分からないままに叫ぶ。自分が何を言ってるかも理解できない。

「それが人だからだ」

優しい言葉。

「そしてお前の事を俺達が仲間だと思ってるからだ。アラガミだとか人間だとかそんなものはどうでもいい」

「訳が分からない……そんな理由だけであんた等は私を……化け物を……アラガミを仲間だつて言えるのか!」

頭を抱えうずくまる。頭の中はグチャグチャで、自分がなんなのか分からなくなってくる。その時にギルさんが私の顔を無理矢理あげさせた。

「お前は化け物じゃねえよ」

「……なんでそう言えるのよ?」

「少なくともお前には意志があるだろ、アラガミには無え意志が。意志を持つのは人間だけだ。心もな」

「私には心なんて……」

「あるさ、今そうやって泣いてるんだから」

慌てて目元に手をやると、涙が流れていた。温かい涙が

昔、あるヤツに言われた。お前は人間の皮を被った化け物だと。お前に人間として生きる資格など無いと。

だから私は問う

「私は……人間なのかな……?」

「当たり前だ。なあ?」

ギルさんが問いかけるように見回すと全員が頷く。

「私は……人間として生きていいの……?」

「当たり前だ。」

ギルさんに返されて。何も言えなくなってしまう。言葉が出てこない。出てくるのは涙だけだ。

嬉しかった。

遙か昔に感情を殺して生きてきた私にはよく分からないけどこの

胸の奥からわいてくる感情は多分嬉しいという感情で、
私は泣きじやくっていた。子どものように
そんな私をみんなは温かく。迎え入れてくれた。

新メンバー登場

ジュリウスに呼ばれ、ラケル博士の研究室に集められた。研究室に着くと、銀髪のドレス見たいな服の女の子とジュリウス、それと他の面子が集まっていた。どうやら銀髪の子がブラッドの新メンバーらしい。

「本日付けで極地化技術開発局ブラッド所属となりました。シエル・アランソンと申します。ジュリウス隊長と同じく、児童養護施設マグノリアIIコンパスでラケル先生の薫陶を賜りました。基本、戦闘面に特化した訓練を受けて参りましたので、今後は戦術面の研鑽をしていきたい思っています。」

そう言つて綺麗な敬礼を見せた銀髪・・・じゃなかったシエルさんか、心なしか睨まれているけど、私には関係ない。煙草に火をつけ啜える。ラケルが顔を顰めた気がするが、無視する。

「これからはブラッドも、戦術面を考慮した戦闘をおこなっていかうと考えている。そのためにも、指揮系統を充実させるという面において副隊長を置きたいと思つている。そして副隊長はお前だ。神咲」

「・・・はあ？」

「わあー、副隊長」

「ま、順当だろ」

「待つてください。隊長」

シエルさんが異を唱える。

「アラガミに副隊長を任せるつもりなら、隊長の命令と言えど、従えません」

ああそっか、この人は多分生まれた時からアラガミは敵だと教わつて育つてきたんだらう。だからコレが自然な反応なんだ。

「だったら貴女がやれば？」

私は副隊長なんてはじめからやる気は無かつたし、押しつけができてちようどいいくらいにしか考えてない。そう言われて、シエルは少し戸惑つた後、

「了解しました」

そう律儀に答えた。そしてなにやらジュリウスと話し込み始めたので私は博士の部屋から退出した。部屋に戻り目を閉じて、なるべく化け物といわれたことを思い出さないように寝た。

それからシエルが副隊長として、ブラッドはより戦術的に動くことになったらしい。私とジュリウス隊長。そしてなぜかボイコットしたギル以外は、シエルの組んだ訓練メニューで動いているらしい。私は参加していないから知らないが。今日はナナとロミオ共にコンゴウを討伐する予定だ。何事もなければいいが。

「はぁ……」

結果としてミッションは成功したものの、ナナは寝不足。ロミオは疲労でまともに動けてものではなかった。どうしてそうなったのかナナに聞くと、ふにゆううくとかいいなながらシエルが作った予定表を見せてくれた。睡眠と任務以外を、訓練と座学で埋め尽くしてある。正直馬鹿のやることで私は紫煙と同時にため息を吐き出した。

それから数日たって、雑魚アラガミ数対の討伐。それを二箇所で行うというミッションがアサインされた。なのでチームを二つに分け、私、シエル、ギルでA地点。ジュリウス、ナナ、ロミオでB地点を叩く事になったのだが、

「ジュリウス。この子いらない」

私はシエルをさして言う。それに対してジュリウスが、

「個人的な好き嫌いというなら認めないが、お前のことだ何か得理由があるんだろう？」

「邪魔」

私は悪びれもなく言い放つ。その言葉にギル以外のみんなが唾然としていた。

「ふむ……ギルはどうだ？」

「悪いが俺も同意見だ。こいつを連れて行っても邪魔にしかならねえ」

ジュリウスはギルに意見を求め、ギルも悪びれなく答える。

「ふむ……だが今回はチームの作戦というのを重視してメンバーを決めている。悪いが我慢してくれないか」

「チツ……」

ギルが舌打ちするが、シエルは自分が邪魔だといわれたことに違和感を抱いているようだった。

作戦地域で戦略を確認。近場にヤクシヤがいるため、十分に注意しましょう。というシエルの言葉に了解の意だけ示しておく。いくら頭でつかちの馬鹿とはいえ、今は副隊長なのだ。それ相応の態度はとらなくてはならない。そして雑魚アラガミを殲滅中、運悪くヤクシヤに遭遇。

「一旦引きましょう。今回の任務にヤクシヤの討伐は含まれていません。それに対ヤクシヤ用マニュアルにも、他のアラガミとの戦闘中ヤクシヤに遭遇した場合。一旦体制を立て直すこと、とあります！」
「現場の状況に応じて臨機応変に戦う時もある！」

「現場での決定権は私にあります。私の指示にしたがって……」
シエルはその台詞を最後まで言えず。回避行動をとる。シエルとヤクシヤの位置が重なってため、シエルごと斬ろうと私が振り下ろしたチャージクラッシュを避けるために。そしてその一撃は、ヤクシヤの頭を叩き割るが、両断するには至らない。

「チツ……浅いか」

「何を……！」

後ろで何か聞こえたが無視だ。私には関係ない。それよりも目の前のヤクシヤだ。

「ギル！援護頼んだ！」

「了解だ！」

前にギルさんから援護が必要なら遠慮なく言えと言われていたから遠慮なく言わせてもらおう。ギルさんが左から、私は右から突っ込む。ギルのスピアがヤクシヤの足を削り、ダウンさせる。その隙に私はチャージを始める。

「消えな……!!」

私の全力の一撃とともにヤクシヤが地面に倒れた。それを確認してギルがコアを回収する。そのときちょうど通信がはいり、

「こちらブラッドβ。対象の殲滅を確認した。そちらはどうだ？」

「お疲れ様です隊長。こちらは……」

シエルが少し口ごもる。作戦通りにいかなかったことが不満なのかどうかは知らないが、答えにくそうにしていることは確かだ。

「こっちも問題なしだ」

ギルさんが答え、ならば帰等しろという声に了解とだけ返し、迎えの来るポイントまで向かう。考え込むシエルを連れて

私の友達

あのミッションから1週間。

特にシエルとは仲直りした訳でもなく、かと言って避けているわけでもない。向こうはどうか知らないが。

1週間の間で私はラケル博士に昔のシエルの事を聞いた。いや聞かされた。訓練と称した拷問。そんな事をシエルはやっていたらしい。

それから極東支部のアリサ・イリーニチナ・アミエーラという人にも出会った。昔の知り合いに似てるとか言われたが他人の空似だろう。

それからシエルに謝罪された。ジュリウスに相談に行った時に、ついでに私の事もいろいろ聞いたらしい。余計な事を……。友達になつてくれますかとも言われたがそれは断った。私には必要ないから。

更にフライアは極東支部に向かう事になっていた。グレムは難色を示していたが、神機兵運用のデータ採取が必要とのラケルの言葉により折れた。

そして今、何故か私はジュリウスとシエルと共にグレムの部屋に来ていた

「ブラッド隊長ジュリウス・ヴィスコンティ、以下二名。入ります」

「ラケル博士から聞いていると思うが……、神機兵の無人運用テスト、及びその護衛をしてほしい。詳しくは……、あー、クジョウ君」

「は、はい。えー、お二人は確かラケル博士とレア博士の元で……」

「はい、我々は両博士に育てて頂きました。ですので、神機兵の運用テストで搭乗した事もあります」

「ならば話は早い。要するに神機兵が戦う様子を観察しつつ、いざという時は守つていただきたいのです」

「露払いをしろ。という事ですか」

尋ねるわけでもなく断定するようにジュリウスが言う。それに、当然だというふうに頷くグレム。

「今回の主役はあくまで神機兵だという事を忘れるな。あとは現場で

話を詰めてくれ、俺も何かと忙しいのでな」

それだけ言って後ろを向くグレム。クジヨウ博士とジュリウスは何かを話、私達は退出した。

その後ジュリウスから通達されたミッション内容は、神機兵がアラガミと一対一で戦うための露払いというものだった。

「そこまでしないと戦えないの？あの神機兵は」オモチャ

私は素直な感想を呟く。それに対して

「現在は試験稼働中との事ですから」

淡々と返すフランさん。ただまあ確かに試験稼働中の兵器にイキナリ万全に動いて見せろと言ったって無理な話だ。それは分かっているのだが。

「そろそろ出発時間です。準備をお願い致します」

私の思考はフランさんのその言葉によって中断される。

なんでもいいが問題なく動いてくれさえすればいい。その幻想は儚く打ち砕かれた。

ミッション出動後。エリアの手前と奥にコンゴウが一体ずつ。神機兵αが奥。βが手前で、αにシエル。βに私がついて護衛。ナナ、ロミオ、ギルさんで周囲の索敵、及び掃討をするという流れになった。ある程度までは予定通りに行き、神機兵βはコンゴウを危なげも無く撃破した、が

「神機兵α、背部に大きな損傷。フライア、判断願います」

シエルからの通信。クジヨウ博士の憎々しげな声と同時に、フランさんが神機兵の起動を停止。神機兵の護衛に入ろうとしたが、そこでジュリウスから、

「さて、帰還の途中に赤い雲を見かけた！あれは恐らく……」

「……赤乱雲!?!」

そんなやりとりの間にギルさんが目視で赤乱雲を確認。輸送部隊の救援は不可能との判断。

「ブラッド各員。防護服を着用し、シエルの救援に迎え！戦闘の際に防護服が破損する可能性がある。可能な限りアラガミとの戦闘を「待て！勝手な命令を出すな！」ッ!?!」

ジュリウスの指示の途中で飛び込んでくる怒声。

「グレム局長・・・ッ！」

「神機兵が最優先だろ。おい、アラガミに傷つけられないように守り続ける」

「馬鹿な！赤い雨の中では戦い用がない！」

「俺がここの最高責任者だいいから命令を守れ！神機兵を守れ！」

「人名軽視も甚だしいッ！あの雨の恐ろしさは貴方だって知っているはずだ！」

激しい言い争い。それに水をかけたのは

「隊長・・・、隊長の命令には従えません」

別方向からの通信。シエルによる・・・命令拒否。

「不十分な装備での救援は赤い雨による二次被害を高確率で招きま
す。よって、上官であるグレム局長の命令を優先し、各部隊その場で
待機すべきだと考えます」

全員が絶句する。しかし覚悟を決めているのかシエルの声色は硬
い。

「・・・更新された任務を、遂行します」

通信が切られる。ジュリウスが呼びかけるが応答しない。グレム
は躡が行き届いてあると感心していた。

私はナナが持っていた防護服をひつたくり、駆け出す。シエルの元
へ。目の前で救える命を。今度こそ救うために。

「あのく隊長」

「どうした？ナナ」

「神咲ちゃんがね・・・防護服持っていつちやった」
「何ッ!？」

私は走る。目の前に停止した神機兵と、シエル。

「どけエエエエエエー！」

目の前のシユウをバスターソードで殴り飛ばし、立ち塞がるヤク
シヤを顔面から叩き割る。

たどり着いた。シエルの元へ。

「神咲・・・さん・・・」

「間に合った．．．、持ってきたよ、防護服」

私は赤い雨でグチャグチャで、笑っているのかどうかもわからない顔をシエルに向ける。

シエルが防護服を着るのを見届け、奥に引っ込むように言う。

「間に合ったんだ．．．今度こそ．．．、今更．．．失つてたまるか！」
初めて私と友達になろうと言ってくれた。見識を改めて私と普通に接してくれた。私を嫌悪しないでくれた。

もう十分だ。

私がこの子を助ける理由には。

十分すぎるほど足りている。

だから

「今度は．．．私が救う番だね．．．」

目の前に押し寄せる大軍。増援はなし。それでも不思議と負ける気はしない。赤い雨のせいかもしれないし違うのかもしれない。でもなんだっていい。

「私の友達に手エ出そうってんなら．．．、私を殺してからにしろ！」

咆哮と共に、私は戦う。